

# 島嶼看護高度実践指導者の育成と将来への展望

沖縄県立看護大学学長 野口美和子

皆さんこんにちは。文部科学省の教育改革推進事業（いわゆる GP）、「島嶼看護の高度実践指導者の育成」プログラムの、本国際シンポジウムにご参加下さいましてありがとうございます。そして、特に遠方のオーストラリア、グアム島、テニアン島、そして日本本土からからお越しいただいたシンポジスト、Dr. イザベル、Dr. サリー、Dr. アーレー、Dr. 石垣先生に感謝いたします。本日は、宮古島にあります本学の宮古島教室から TV 会議システムを通して参加している方もいらっしゃいます。

従来、島の暮らし、島の看護については相反する評価がされてきました。例えば「島の暮らしは乏しく悲しい」のに対して、「島が一番美しい、島でずっと暮らしたい」というものです。また、「島でずっと看護していると遅れる、進歩から取り残される」のに対して「島での看護はやりがいがある、本当の看護に出会えた」という具合です。

沖縄には多くの小離島があります。そして沖縄自体が島なのです。古来より、琉球列島と呼ばれ太平洋の島々と交流してきました。何よりも、日本国はそもそも島国なのです。日本の、とりわけ沖縄の看護を考えると、島嶼看護学の追究、研究はとても大切な課題といえます。

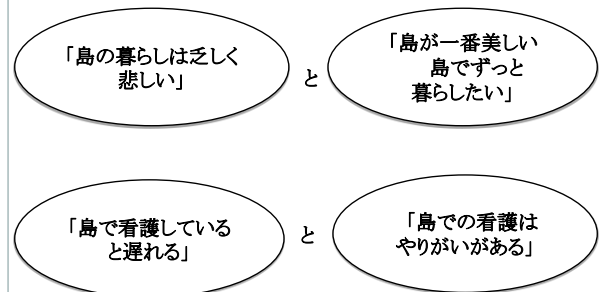
沖縄県立看護大学は、開学のための基本計画においてすでに「島嶼看護」の教育、研究が打出され県民に約束されておりました。開学後 10 余年の間、島嶼看護学の講義や島嶼での実習が一部で行われており、また様々な教育研究領域で、島の看護に関する研究が行われてきました。しかし、それは十分であったでしょうか。大学全体として組

## 島嶼看護高度実践指導者の育成と将来への展望

沖縄県立看護大学学長  
野口 美和子

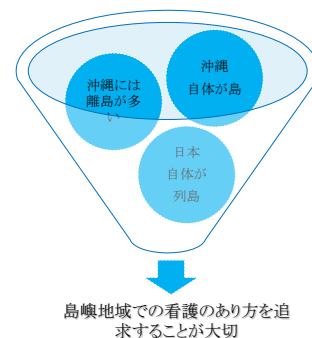
1

### 島嶼看護の海へ漕ぎ出すきっかけ(その1)



2

### 島嶼看護の海へ漕ぎ出すきっかけ(その2)



3

織的に取組んできたとは言い難く、反省させられました。

そこで、平成 20 年に、2 つの GP に応募いたしましたして採択されました。このシンポジウムを開催している大学院 GP と同時に採択された学部 GP は、「島嶼環境を活かして学ぶ保健看護の教育実践」でした。島国である日本の文部科学省ですから、又、小離島を多くかかえる沖縄県の看護大学からの申請ですから、「これを支援するのは当然のこと」とも言えますが、(義務とは言いませんが) 文部科学省の支援の「追い風」は、とても嬉しく有り難いと思いました。

まず、島嶼看護についての考え方をお話していきたいと思います。

「島嶼」とは地理的用語であると同時に歴史、産業、経済を含む、諸要因に規定される文化的用語でもあります。地理的には「環海性」そして、歴史、文明、文化的には「隔離性」の特質を背負います。そこから「幸」も「不幸」も「便」も「不便」ももたらされています。海、陸からの多様な恵み、そして島ならではの明るく光輝く風景があり、狭ければ狭いほどに人々はすぐに会え、顔見知りで深く繋がって暮らしています。四方に広がる海からは海流に乗って多方面からの文明が流れつき、そして、隔離された中で独自の文化が育まれるという特徴も生まれます。だから人々は、島を愛し島を誇りに思い「島で生涯暮らしたい」と希望を抱き、希望の実現を支える看護職はやりがいがあると思えるのでしょう。一方、グローバル化が進む現代社会の先進性、合理性、機能性、専門分化、都市化から見ると、海が荒れ交通の不便な島では、物資、情報に乏しく、開発が遅れるために若者や病弱なお年寄りが外に出て行き、別れの悲しい体験が多くなります。先進医療施設や専門職の数も少なく、何となく置いて行かれる不安を感じる現実もあります。

そのような島の暮らしと看護の特徴を踏まえて

島嶼看護の海へ漕ぎ出す  
きっかけ(その3)

沖縄県立看護大学は  
開設時から島嶼看護学の教育をしている。  
島嶼看護の研究も進めている。

しかし  
それは十分であったか?

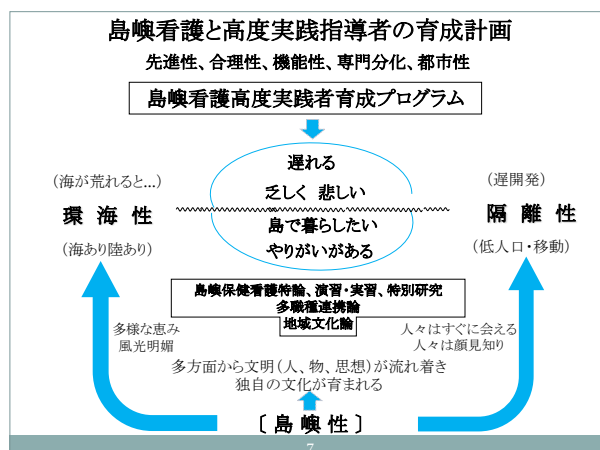
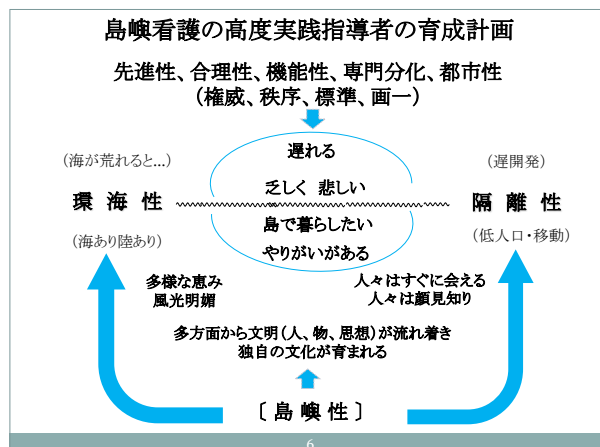
4

船出 (文部科学省の2つのGPが同時採択)

組織的な大学院教育改革促進プログラム  
「島嶼看護の高度実践指導者の育成」

質の高い大学教育促進プログラム  
「島嶼環境を活かして学ぶ保健看護の教育実践」

5



島の看護を担いリードする「島嶼看護の高度実践者」を育成しようとするのが本プログラムです。

平成21年4月に本プログラムに入学した大学院生は、講義、演習、実習を終え、今3人が課題研究、博士論文にかかる研究に取りかかっています。まだ仮題ではありますがそのテーマをお示ししております。

修士課程での課題研究のひとつ、「島嶼における保健看護活動の評価のあり方」は、40年にわたる島の保健師の活動、なかでも母子保健活動に焦点をあててその発展過程をほりおこしデータとし、それに“島の看護を発展させたものは何であったか”を問いかけて導き、それを評価の視点とする活動モデルとし後輩保健師に残していこうとするものです。

次の課題研究「離島診療所における高齢者の内服自己管理への看護師の支援」は高齢者の内服薬の自己管理支援という一見ありふれた看護活動を通して、島での看護の特質を求め、あり方を検討するものです。

博士論文にかかる研究として、「島嶼地区の中核病院が行う離島支援の看護活動モデルに関する研究」は、本プログラムを置いている宮古島市にある県立宮古病院がこれまで行ってきた離島支援の諸看護活動を見直し、改革を図るために設けられた委員会に院生を参加させていただき、その全過程を分析対象として、離島支援の看護のあり方を検討し、モデルを提案する試みです。

これら3人の研究指導をする中で、“これは島の暮らし、島の看護らしい”と思われる現象が見えてきています。これを「島の強み、あるいは島の強みを活かすこと」と考えられる現象と、「島の弱み、あるいは島の弱みを克服すること」と考える現象とに分けて検討してみたいと思います。

島では住民の状況は全て分かってしまう。「今、息子が帰ってきているから訪問しよう。」「障害児の妹を兄が連れて遊んでいる。だから、兄の同級生達は障害児との付き合いに慣れているらしい」ということがわかる。これは障害者のノーマライゼーションを大いに前進させるものです。「精神障害者も、サトウキビの収穫時期は手伝っている。だから、巡回診療にも出てこない」とても良い傾向です。「受診は忘れるが、デイケアへはちゃんと来ているので、そこに呼びに行けば、受診は可能」「服薬指導をしているつもりが、いつの間にか家の改修や家族の生活指導にまで広がってしまう」もあります。

「この島で暮らしたい、この島が好き」という島の人の気持ちを保健師や看護師が分かっている。「重度身体障害児のリハビリが、この島でできなかったために、家族ごと島を離れなければならないことは残念！これをどうにかしたい！！」という気持ちが、母子保健活動として障害児療育巡回相談をはじめの原点となっています。

### 実践的看護研究指導を通して見えてきつつある 島嶼看護の高度実践

- 課題研究(修士)  
島嶼における保健看護活動の評価のあり方(仮)
- 課題研究(修士)  
離島診療所における高齢者の内服自己管理への看護師の支援(仮)
- 特別研究Ⅱ(博士)  
島嶼地区の中核病院が行う離島支援の看護活動モデルに関する研究(仮)

8

### 島嶼環境の強みを活かし、弱みを(中和、無毒化し) 克服(強みに転じ)する看護実践活動

#### 強みを活かす 1

#### 島では住民の状況は全てわかってしまう

- 今、息子が帰ってきているから訪問しよう
- 障害児の妹を兄が連れて遊んでいる。  
だから、兄の同級生達は障害児とのつき合いに慣れているらしいことがみえてくる
- 精神障害者も、サトウキビの収穫時期は手伝っている  
だから、巡回診療にも出てこない
- 受診は忘れるが、デイケアへはちゃんと来ているので  
そこに呼びに行けば、受診は可能
- 服薬指導をしているつもりが、いつの間にか家の改修や  
家族の生活指導まで広がってしまう

9

また、今回の研究にはできませんでした。島では、小規模多機能（型）の高齢者ケア施設というのを発展させています。若者が島から出ていきますので、ひとり暮らしの高齢者が非常に多い。このような施設は「最後まで島で生活したい、島で最後を迎えたい」という人々のための、島ならではの開発であったと考えています。

「みんなで助け合っとうにかしたい」こんな気持ちの人が住んでいるというより、こんな気持ちになってしまうのが島のようです。「役場の職員であれば、救急搬送や台風時に寝たきり老人達のためのそれぞれの世話はすぐにできる。何をすればいいのかわかっている」、「健診の成果が見えてくると、参加する役場の一般の（保健師以外の）職員の力の入れ方が違ってくる」こともあります。

島では何でも言い合える、何でも頼める。「保健師は障害児を持ったことがないから、親の気持ちわからんでしょう」と面と向かって言われ、それでハッと我にかえり、色々工夫していった。「同じ境遇の親が話し合えるとよいと経験者に初心者のケアを頼んだら、すぐに引き受けてくれた」「事務に頼んだら、始めは、“仕事が増える”と渋々だったが、成果がみえてくると、“島の子供達のことだから”と夢中になってやってくれる」そして「懇親会で三線も弾き、家族に頼んで素麺を湯がいてもらう、何でもした。島の子供達のためだもの」という方がいらっしゃるのです。

「集まって、食べて、楽しめば、繋がっていく」「集まると必ず山羊汁をつくる、みんな仲良くなる」。他の島ではどうでしょうか？「母親同士がゆっくり過ごせるように、保健師は昼食の手配をする」、これが島の保健師の大切な仕事なのです。「本土の研究者が健診で来たときは、手を替え品を替えてもてなし、夜も研修会を開き、楽しく学んだ。それが良かったから、（研究者を）飽きさせずに長続きした」。飽きさせなかつただけでなく、心が通じたようです。

## 強みを活かす 2

### この島で暮らしたい、この島が好きという 島の人の気持ちがわかっている

- 重度身体障害児のリハビリが、この島でできなかったために、家族ごと島を離れなければならないことは残念！これをどうにかしたい！！

10

## 強みを活かす 3

### みんなで助け合っとうにかしたい

- 役場の職員であれば、救急搬送や台風時に寝たきり老人達のためのそれぞれの世話はすぐにできる
- 検診の成果がみえてくると、参加する役場の一般の職員の力の入れ方が違ってくる

11

## 強みを活かす 4

### 島では何でも言い合える、何でも頼める

- 「保健師は障害児を持ったことがないから親の気持ちわからんでしょう」と言われた
- 同じ境遇の親が話し合えるとよいと、経験者に初心者のケアを頼んだら、すぐに引き受けてくれた
- 事務に頼んだら、始めは、“仕事が増える”と渋々だったが、成果がみえてくると、“島の子供達のことだから”と夢中になってやってくれる
- 懇親会で三線も弾けば、家族に頼んで素麺を湯がいてもらう、何でもした島の子供達のためだもの

12

## 強みを活かす 5

### 集まって、食べて、楽しめば、繋がっていく

- 集まると必ず山羊汁をつくる、みんな仲良くなる
  - 母親同士がゆっくり過ごせるように保健師は昼食の手配をする
- 本土の研究者が検診で来た時は、手を替え品を替えてもてなし、夜も研修会を開き、楽しく学んだそれが良かったから、飽きさせずに長続きした

13

次は「弱みを克服する」です。島では交通遮断、輸送遮断が頻繁に起こります。「台風がよく来るので、そんな時は、島中の医療施設の医薬品の在庫を知らせ合ったりして、仲良くなっている」「台風の通過の日数が予測できるので、必要なら在宅酸素療法患者は入院してもらうので安心して在宅療養ができる」や、「海の荒れ具合、家族の繁忙などがわかるので、離島の臨月の妊婦は早めに入院してもらう」。こんな社会的入院というより島の入院も工夫されているようです。本土からの研究者と「(宮古諸島の) 離島健診に行って、台風で1週間も閉じ込められた。新しい事業計画や研究計画を立て意気投合し、それで、仲良くなれたし、エンパワーメントされた」。このように「禍を転じて福となす」したたかな態度が形成されるのです。

人口規模が小さい島では各種専門職を揃えることができません。又、専門職は都会に偏在する傾向にあります。しかしそれを逆手にとって、「専門の医師や臨床心理士がいなかったから、研修で知り合った本土の一流の研究者に頼って、見事な専門家チームでの一斉健診が実現できた」「志の高い一流の専門家に同行訪問したことで、障害児家族指導の一流のやり方を身に付けた」ということがあります。「課題によっては、多少のメンバーの変化はあるものの、ほぼ同じような人が集まってくるので、ツーカーで分担したり、交代しているうちに、ノウハウを学び合っている」と言っています。

「ないものねだりをしないでいるうちに諦めてしまう」。「本島から赴任した保健師が訓練を受けずに放置されている障害者を見て、“この人達も幼い頃に訓練を受けていたら、もっと豊かに生活できていたはず”という“外からの目”に触発されたことが、巡回療育相談を発展させた原動力」となっています。常に外部に目を向け、新しい動きに関心を持っていることが島では必要なのです。

「“遅れている”意識を持ちやすい」。「保健師が

### 弱みを克服する 1

#### 交通遮断、輸送遮断が頻繁に起こる

- ・台風がよく来るので、そんな時は、島中の医療施設の医薬品の在庫を知らせ合ったりして、仲良くなっている
- ・台風の通過の日数が予測できるので、必要なら在宅酸素療法患者は入院してもらうので安心して在宅療養ができる
- ・海の荒れ具合、家族の繁忙などがわかるので、離島の臨月の妊婦は早めに入院してもらう
- ・離島検診に行って、台風で研究者とともに1週間も閉じ込められた。新しい事業計画や研究計画を立て意気投合し、それで、仲良くなれたし、エンパワーメントされた

14

### 弱みを克服する 2

#### 専門職がない

- ・専門の医師や臨床心理士がいなかったから、研修で知り合った本土の一流の研究者に頼って、見事な専門家チームでの一斉健診が実現できた
- ・頭では理解していたが、志の高い一流の専門家に同行訪問することで、障害児家族指導の一流のやり方を身に付けた
- ・課題によっては、多少のメンバーの変化はあるもののほぼ同じような人が集まってくるので、ツーカーで分担したり、交代しているうちに、ノウハウを学び合っている

15

### 弱みを克服する 3

#### ないものねだりはしないでいるうちに諦めてしまう

- ・本島から赴任した保健師が訓練を受けずに放置されている障害者を見て、「この人達も幼い頃に訓練を受けていたらもっと豊かに生活できていたはず」という「外からの目」に触発されたことが、巡回診療相談を発展させた原動力

16

### 弱みを克服する 4

#### “遅れている”意識を持ちやすい

- ・保健師が住民と相互信頼関係にあったから島の住民と本土からの専門家を結びつけたので、住民はすぐに堂々と研究者と話し合うことができていた
- ・一流の専門家・研究者達から、自分達がそれまで普通にやっていたことを注目され、良い評価をされて、自信を持った

17

住民と相互信頼関係を築き、住民と本土からの専門家を結びつけたので、住民はすぐに堂々と研究者（専門家）と話し合うことができていた」。住民は初め、驚いて腰が引けていたようです。「一流の専門家・研究者達から、自分達がそれまで普通にやっていたことを注目され、良い評価をされて自信を持った」こともあります。また、研究者は島の保健師が島の住民全てをよく把握していること、自分の子供のように島の子供達のことを心配している事に感動をしたというのです。

これら院生の研究で見えてきている島の暮らしと看護の特徴を踏まえて、「島嶼看護の高度実践」とは何かを考えてみました。島の住民と看護職は文化を共有して狭い島に隔離され、海に囲まれた島で共に暮らしている。そのような状況で生まれる相互信頼をベースにして、「すぐに集まれる。助け合う」「みんなが知り合い。自分のことのように考えられる」を武器にして、「島の強みを活かし弱みを克服する柔軟看護活動」を組織し、島のケア能力、島の看護能力を育成しているのではないかと推測されます。これをこれからの研究でさらに検証していきたいと考えています。

したがって、島嶼看護の高度実践指導者には、先進性、合理性、機能性、都市性の政策・理論・技術に対して、互いに助け合って、島に住み続けたいと共に思っている地域文化の「繋げる力」、「本音で話し合い、助け合う体験の積み重ね」、つまり暮らし方に現れる島嶼性を基盤にして、柔軟な発想で独自の取り組みをし、島のケア力・看護力を育成し、地域づくり、島づくりをし、その結果、「多様な活動を創出」しつつ、島嶼看護学の確立に貢献していくことが求められていると考えます。

私どもがGPプログラムで目指したものは、沖縄の地、先島において島嶼看護の高度実践指導者の育成を通して、アジア太平洋の島々、世界の島々で働く看護職と学び合いながら島嶼看護学の確立を目指すことでした。それは地域看護学を豊かにし、文化看護学に多くの事実を提供します。この二つはこれからの21世紀のグローバル時代の看護の新しい基盤となるはずで、そして新しい時代の看護教育を開くかもしれません。近い所で、私共の研究成果はルーラルナースング学会で発表されるでしょう。地球が狭くなり、水が不足し不耗化しています。島だけでなく、大陸の奥地、陸の独島も人々が豊かに暮らす所になっていくことを念じて、まとめにしたいと思います。ありがとうございました。

